

巻頭言

今年の夏も猛暑でした。秋のお彼岸を過ぎ、朝夕はようやく凌ぎやすくなってきました。会員や読者の皆様にはお変わりなくお過ごしのことと拝察します。

さて、COVID-19 感染症の蔓延以降、医療機関や介護保険施設のリハビリテーション部門での勉強会・研修会等の機会は、大幅に減少しているということです。最も流行していた当時、勉強会等の機会を減少させざるを得なかったということは、重々理解しております。懇意にしている理学療法科長に伺ったところ、COVID-19 感染症が収束しても、いわゆる“勉強会控え”は回復していないとのことでした。

その背景に、ワークライフバランスの考え方の若年世代への浸透、上司が部下に勉強を強要すると“ハラスメント”に該当すること等々が絡んでおり、リハビリテーション部門の管理職は大変苦勞しているようです。

とはいっても、対象者の皆さんは、幅広い知識や高い技術を携えたセラピストの治療を日々待っていただいていますので、私たちは日々研鑽し、知識や技術を蓄えなくてはなりません。すなわち、対象者の心身の回復の希望が基軸にあって、私たち医療従事者側も「有効なリハビリテーション技術を提供したい。対象者の皆さんの希望を叶える手伝いがしたい」という熱意や善意が必要になります。日常業務はこのような一コマ一コマの連続であります。一方、知識や技術が不足していると感じているセラピストは、一層の自助努力が求められ、それにより職種のアイデンティティを高め、リハビリテーションという領域や分野を通じて社会に貢献することになります。したがって、卒業後の自助努力といったことが求められます。

このような状況の中、総合理学療法研究会は、研究会発足からこれまでの20年余りの期間、学びの機会を提供し続けております。学術集会は2025年11月の開催で第29回を数え、雑誌「総合理学療法研究」は第4巻を発刊します。

どうぞ、若手セラピストをはじめとする皆様、当研究会の各種ツールを活用して、知識と技術の向上、さらにはキャリアアップを図っていただけますと幸いです。一緒に成長していきたいと願うこの頃です。

大阪人間科学大学
保健医療学部 理学療法学科
山野 薫